

日本語母語話者大学生の 言語コミュニケーション

—親しさと上下関係を中心に—

北 島 礼 子

1. 研究目的

日本人と留学生がコミュニケーションをとる際に、留学生が日本人学生同士の話に割り込まずに発話することができない場面を多く見かける。個人差や言語、社会背景によって話者交替の構造は異なるが、摩擦を生み出す要因の一つに留学生が日本語のコミュニケーションのルールを知らないことが挙げられる。本研究は、日本人学生の会話を分析し、どんな言語活動が行われているのかを調査し、考察することによって留学生と日本人学生間のコミュニケーションの一助にすることが目的である。

2. 先行研究

会話は基本的に、一人が話し、相手が聞く、次に今まで聞いていた人が話し、相手が聞く、というパターンを取る。一人がずっと話し続けることは頻繁に見られるが、「話し手」「聞き手」としての役割が入れ替わって会話が進むというのが一般的である。本論は中山（2003）の定義を用いて、話し手が一続きに話したものを「ターン」と呼ぶ。また、林（2008）では「話者交替」とは会話の構成に見られる最も基本的なシステムの1つで、会話に関与するものが、話し手と聞き手に分かれて義務を行使し、会話に参加することを指すと述べている。本論では「話者交替」の定義としてこれを採用する。

日本語母語話者同士の話者交替の特徴については以下のように指摘されている。

- ・必ずしも1人の話し手が完結させるのではなく、話し手と聞き手の2人で作っていくものである（水谷1993）。
- ・聞き手は話し手のポーズの有無にかかわらず、turnを譲ってもらいたいというサイン（つまり、あいづち発話）を送り、それに成功している。それはコミュニケーションにおけるいわゆる聞き手の役割は話し手の役割と同様に大きいことと考える（CHOI2010）。
- ・日本人による“discussion”では会話の参加者それぞれが進んでturn-takingを行う（小室 1995）。

このように、日本語母語話者の言語コミュニケーションは話し手と聞き手が協同して行う

傾向にあることが分かっている。

では実際に、留学生と接触機会の多い日本語母語話者の大学生はどのように日本語コミュニケーションを行っているのだろうかと疑問に思った。そこで以下の調査を行った。

3. 調査

3-1. 調査方法

20代の学生男女3人を1組とし、雑談15分・議論15分の会話を使用する。雑談と議論の区切りは筆者が行った。その様子をビデオで撮影し、音声を文字データ化し分析・考察した。

- ① 大学生3人×1グループ（親しい・上下関係なし）
- ② 大学生3人×2グループ（親しい・上下関係あり）
- ③ 大学生3人×1グループ（親しくない・上下関係なし）
- ④ 大学生3人×1グループ（親しくない・上下関係あり）

延べ15人、計5グループ150分の会話を調査対象とする。

各グループの特徴は以下の通りである。

表1 各グループの特徴

	親疎	上下関係	関係性
グループ1	親しい	あり	同じアルバイト先の先輩2人・後輩1人
グループ2	親しい	あり	同じゼミの先輩2人・後輩1人
グループ3	親しい	なし	同じゼミの同学年3人
グループ4	親しくない	あり	初対面、先輩2人・後輩1人
グループ5	親しくない	なし	初対面、同学年3人

以下、グループ1,グループ2のようにグループ番号で呼ぶ。

議論のテーマは「無人島に3人で漂着しました。助けがくるまで、生活をする中で3人の役割と3つのルールを決めてください」である。テーマを決定するにあたり、知識が前提条件となるものではなく、価値観を問うテーマであることを考慮した。自由話題である雑談と話題を限定した議論とは、どのように異なるのかを検証していく。

3-2. 分析方法

採取した談話データを文字化し、そのトランスクリプトを基に分析を行う。分析に用いた項目は文末のスピーチレベル、笑い・沈黙・その話題と話題提供話者である。なお、データを文字化するにあたり、BTSJ2011年度版の「基本的な文字化の原則」を用いた。

3-2-1. 話者の記号

「OW1」「YM1」など話者にはそれぞれ記号を用いた。男性には「M」、女性には「W」

を表記し、それぞれの話者を区別するために通し番号を付けた。また、上下関係のあるグループに関しては、年上には「OW1」「OM1」のように「O」を、年下の話者には「YW1」「YM1」のように「Y」を記号の最前に表記した。なお、上下関係がないグループに関しては「W4」「W5」のようにし、「O」「Y」などの記号は付けない。

3-2-2. 文末のスピーチレベル

述語の形態により、そのスピーチレベルで分類した。なお、倒置文や疑問文に関しては平叙文に直した後、その述語で文末のスピーチレベルを決定し、記号化した。

P (Polite form) あいさつ、及び、文末が敬体（です/ます体）やその活用形である発話文。

またその発話文に終助詞「ね」や「よ」が文末にある発話文も含む。

N (Non-polite form) 文末が敬体を含まず、常体やその活用形である発話文。また、名詞で終了した発話文も含む。Pと同様に、終助詞「ね」や「よ」が文末にある発話文も含む。

NM (No Marker) 発話文として認定したあいづちや笑い。また、述語がない発話文も含む。

— (対象外) 途中発話文（言い差し文）や従属節で終わる発話文。

3-2-3. 改行の原則

基本的には、話者が交替するたびに改行する。しかし、話者が交替しなくとも、同一話者が複数の「発話文」を続けて発するときには、「発話文」ごとに改行する。

3-2-4. 話題の移行による分析単位の設定

会話データをコーディングするにあたり、分析単位として話題の移行と話題提供者を用いた。筒井（2012）に基づき、以下の基準で話題を区切る作業を行った。

1. それまで話題となっていた対象や事態とは異なる側面への言及
2. すでに言及された対象や事態の異なる側面への言及
3. すでに言及された対象や事態の異なる時間における様相への言及
4. すでに言及された対象や事態について、それと同種の対象や事態への言及
5. すでに言及された個別の対象や事態の一般化

なお、本論では3. 及び5. は観察されなかった。

3-2-5. ターン保有率と話題提供率

ターン保有率とは1グループの総発話文数（excelの行カウント）中に占める1人当たりの総発話文数である。話者1人当たりの総発話文数はそれぞれの話者の文末「P」「N」「NM」「-」の総和と等しい。

また、話題提供率は最初に談話の文字テキストを元に話題の区切りを付ける作業を行った（3-2-4参照）。その後、その話題を提供した回数を話者1人当たりの総発話文数で割ったものである。

4. 調査結果

4-1. 各グループの談話の傾向

4-1-1. ターン保有率と話題提供率の関係

各グループの分析結果から、どのグループでもターン保有率が高い話者は話題提供率が高いことが明らかになった。本項では各グループでターン保有率が最も高い話者と最も低い話者、話題提供率が最も高い話者と最も低い話者を取り上げ、検証していく。

表1では各グループの最もターン保有率が高い話者と最も会話を提供した話者を表にした。数値は<雑談>と<議論>の合計を1とした時の割合である。

表2 グループ毎の最もターン保有率が高い話者、最も話題提供率が高い話者とその割合

	最もターン保有率が高い話者	最も話題提供率が高い話者
グループ1（親しい・上下あり）	OW 1（39.63%）	OW 1（64.21%）
グループ2（親しい・上下あり）	OW 2（39.51%）	OW 2（46.76%）
グループ3（親しい・上下なし）	W 4（43.53%）	W 4（56.25%）
グループ4（親しくない・上下あり）	OM 3（37.32%）	OM 2（41.88%）OM 3（41.46%）
グループ5（親しくない・上下なし）	W 7（36.37%）	W 7（59.08%）

グループ4を除き、最もターン保有率が高い話者と最も話題提供率が高い話者は一致した。グループ4についても、最もターン保有率が高い話者であるOM3が話題提供率ではOM2とほぼ同じ数値であることから、ターン保有率が高いと話題提供率が高い傾向があると言える。また、上下関係があるグループでは年上話者がターン保有率・話題提供率が高いことが読み取れる。

表3 グループ毎の最もターン保有率が低い話者、最も話題提供率が低い話者とその割合

	最もターン保有率が低い話者	最も話題提供率が低い話者
グループ1（親しい・上下あり）	OM 1（29.85%） YW 1（30.52%）	YW 1（5.27%）
グループ2（親しい・上下あり）	YW 2（26.53%）	YW 2（31.18%）
グループ3（親しい・上下なし）	W 5（27.73%）	W 5（13.75%）
グループ4（親しくない・上下あり）	YM 2（26.60%）	YM 2（16.67%）
グループ5（親しくない・上下なし）	W 9（29.73%）	W 9（23.66%）

グループ1を除き、最もターン保有率が低い話者と最も話題提供率が低い話者は一致した。

グループ1についても、最も話題提供率が低い話者である YW1 が話題提供率では OM1 とほぼ同じ数値であることから、ターン保有率が低いと話題提供率が低い傾向があると言える。また、上下関係があるグループでは年下話者がターン保有率・話題提供率が低いことが明らかになった。

4-1-2. 雑談と議論の発話傾向

卒業論文ではそれぞれのグループについて、雑談・議論にわけてターン保有率・話題提供率・文末表現の割合・NMの割合の調査をしたが、紙幅の関係で個別の調査結果が出せないため、まとめの表で示す。

調査結果から、雑談と議論の発話傾向の違いをまとめると以下ようになる。

表4 雑談と議論の発話傾向の違い

	雑談	議論
ターン保有率	上下関係があるグループでは年上話者のターン保有率が高い。	話者交替が多くなり、年下話者の発話数が増える。話者3人のターン保有率がほぼ均等になる。
話題提供率	ターン保有率が高い順に話題提供率も高い。話題提供は年上話者2人かターン保有率の高い話者に限られる。	年下話者・ターン保有率の最も低い話者の話題提供がみられる。
文末の割合	親しくないグループでは同学年でもPでの発話が観察される。年下話者はPでの発話が多い。	年下話者の文単位での発話が増加する（Pが減少し、Nとーの割合が増加する）
NMの内容ごとの割合	年下話者のNMでの笑いの発話が多い。	年下話者のNMのあいづちの割合が増加する

話者それぞれの個人差はあるが、分析結果から、傾向として以上のことが言える。親しさの有無よりも上下関係の有無でその発話傾向の違いが顕著に見られた。

4-2. 上下関係ありのグループの発話傾向

4-1. では全てのグループの全体的な調査結果について述べた。本項では、特に顕著な違いが観察された上下関係ありのグループについて検証していく。

上下関係のあるグループ1・グループ2・グループ4を取り上げる。話者は年上が計6人、年下が計3人である。

4-2-1. 雑談

表5・表6は年上話者と年下話者の発話数とその割合である。年上話者と年下話者の割合が均等でないため、1人あたりの発話数に換算し、そのターン保有率を算出した。

表5 1人あたりのターン保有率と発話文数

	年上話者	年下話者
ターン保有率	59.16%	40.84%
1人当たりの発話数	127	87.67

年上話者の発話がおよそ60%を占め、年下話者はおよそ40%発話していることが分かる。

表6 1人あたりの文末の割合

	年上話者	年下話者
P	6.58%	35.02%
N	58.68%	23.10%
NM	18.82%	29.24%
-	15.92%	12.64%

発話内容に着目すると、年上話者はNでほとんど発話し、Pの割合は最も少ない。それに対し、年下話者はPでの発話が多く、NとNMをほぼ同じ割合で発話している。また、年下話者の発言においてNと-を合わせると35.74%になり、これはPの割合35.02%と近似している。このことから、年下話者はPでの発話が多いが、常にPで話すわけではないことが読み取れる。

表7 1人あたりのNMの内容ごとの発話文数

	年上話者	年下話者
笑い	11.67	18
あいづち	12.17	9

表6から年下話者のNMでの発話が多いことが分かる。その内容に着目すると、表7から、NMは年下話者が年上話者よりも笑いの発話が多いと言える。

4-2-2. 議論

表8 1人あたりのターン保有率と発話文数

	年上話者	年下話者
ターン保有率	52.40%	47.60%
発話数	91.5	82.67

表5と比較すると、年下話者のターン保有率が上昇していることが分かる。これは雑談は年上話者が話題を提供することが多いため、年上話者2人で談話が進行していくのに対し、議論では話す内容が明確であることから年下話者であっても話題提供がしやすいためと考えられる。

表9 1人あたりの文末の割合

	年上話者	年下話者
P (敬体)	4.39%	25.80%
N (常体)	63.44%	37.10%
NM	21.02%	24.60%
-	11.15%	12.50%

表6と比較すると、年下話者がPの割合が減少し、Nの割合が上昇していることが分かる。これは事例1のように年上話者の前の発言を受けて、発話している例が多いためだと考えられる。

事例1 年下話者が年上話者の発言を受けて発言する例 (グループ3：親しくない・上下関係あり)

3 OM1：助けが来る中で、(-)

4 OM2：助けが来るまでってことでしょ。(N)

5 YM1：あ、助けが来るってことが前提でってこと？。(N)

5のYM1(年下話者)は3・4のOM1・OM2(共に年上話者)の発言を受けて、繰り返し発話をしているため、Nでの発話になっている。

表10 1人あたりのNMの内容ごとの割合

	年上話者	年下話者
笑い	8.83	10.33
あいづち	10.33	10

年上話者よりも年下話者のほうが笑いの数が多い。また、表7と比較すると、年下話者は笑いの総数が減っていることが分かる。

5. 考察 年下話者の発話傾向

調査結果から、年下話者はターン回数が少なく、NM(あいづち・笑い)の割合が多い傾向にあると指摘できる。それは特に議論よりも自由話題である雑談でその傾向は顕著である。

では、ターン保有率・話題提供回数共に少ない年下話者は、ターン保有率・話題提供回数が共に多い年上話者との談話において、どのような発話をしているのか疑問に思った。

そこで、上下関係があるグループの年下話者の NM 以外の発話で意見を述べている発話を取り上げ、分類した。その結果、2つに分類された。

(1) 年上話者にターンを指定された場合

(2) ターンを指定されないが、自分の意見を述べる場合

(1) では年下話者は必然的に発話しなくてはならない場合であるが、(2) では年下話者が年上話者の話に入り込む場面である。今回話題にするのは、この(2)である。年下話者が年上話者にどのように働きかけ、自分の発話をしているのかを取り上げていく。

5-1. ターンを指定されないが、年下話者が意見を述べる場合

5-1-1. 年上話者1が全体に問いかけ、それに年下話者が応答する場合

事例2・3は年上話者1が全体に問いかけ、年下話者が応答する発話である。

事例2 年上話者1が全体に問いかけ、年下話者が応答する発話(グループ1)

110 OW 1 : あれ、どんなだったっけ? [↑]、メリダだったっけ? [↑]。(N)

111 YW 1 : あ、そうです、メリダ。(N)

112 YW 1 : あれウケますよね、髪の毛、ボサボサ加減。(P)

110の年上話者 OW 1 の全体への問いかけに対し、111で年下話者 YW 1 は「あ、そうです」と年上話者の発言を受けた後、112で自分の意見を提示している

事例3 (グループ1)

274 OW 1 : じゃあ、自分の夢についてでも話してみる? [↑]。(N)

275 YW 1 : どうですか、夢なんですか、OW さん。(P)

276 YW 1 : あんまりちゃんと聞いたことない気がします。(P)

274で年上話者 OW 1 が全体に対し「自分の夢」という話題提供を行っている。その後、年下話者 YW 1 は「どうですか」と年上話者 OW 1 の発言を受けてから276で自分の意見提示を行っている。

5-1-2. 年上話者の発話に働きかけ、年下話者が自分の発話をしている場合

事例4・5・6は年上話者の発話に対して同意などで年上話者の発言を受けた後、年下話者が自分の意見の発話をしている例である。

事例4 年上話者への同意に続く年下話者の発話(グループ2)

115 OW 2 : 大丈夫だよ。(N)

116 YW 2 : はい、なんか、いろんな人いますよね。(P)

117 OW 3 : うん、いる。(N)

118 YW 2 : 結構、いきなり留学、行っちゃったりとか。(N)

就職活動の話題で、OW 2 が自分の就職活動の状況について述べている場面である。

115のOW 2の発言を受け、116でYW 2は「はい」と年上話者に同意した後、自分の意見を提示している。

事例5 (グループ4)

61 OM 2 : 悪いなあ、お前それじゃあ卒論できないだろ。(N)

62 YM 1 : 卒論で映像使うんですか? [↑]。(P)

63 OM 2 : 映像とこれ、文字書き起こすらしいよ。(N)

64 YM 1 : 文字書き起こす? [↑]。(N)

事例5ではYM 1が年上話者OM 2・OM 3が発したキーワードを繰り返すことで、年上話者の発言を受けている。その後、自分の疑問点である「卒論で映像を使うこと」と「文字を書き起こす」ことを聞き返している。

事例6 (グループ4)

92 OM 3 : いやあ、オレジューうま。(N)

93 YM 1 : ふふふふく笑い。(NM)

94 OM 2 : オレジュー……。 (N)

95 OM 3 : オレジューっすよ、オレジューやっぱ氷ない方が、 (-)

96 YM 1 : それあれだ、最強だ。(N)

97 OM 3 : 100パーでしょ、やっぱり。(N)

98 YM 1 : 溶ける前に飲みきっちゃったらいいんじゃないですか?。(P)

99 OM 3 : それはねえ、もったいないよ。(N)

100 YM 1 : ツクっと、じゃなかったら先に食べちゃうとか。(N)

OM 3が自身が好きなオレンジジュースのおいしさについて述べている場面である。95でOM 3の発言に対し、笑いで応答する。そして96でもOM 3の発言に同意した後、98・100でオレンジジュースの飲み方の意見提示を行っている。ここでも年下話者の発話は、【年上話者に同意→意見提示】のストラテジーが用いられていることが分かる。

このように、年下話者はターンを指定されない場合、年上話者の発話にあいづちや笑いによって同意し、その後自分の意見を述べている傾向が高いことが分かった。ターン取得率・話題提供率共に低い年下話者は年上話者の発言を受けて談話を展開していくとターンを取得しやすいと考えられる。

6. まとめと今後の課題

従来のコーパスは話者2人間のものが多く、学生のグループ会話を対象にしているものは

極めて少ない。本研究の新しさは3人での会話を分析したことである。周囲でどんどん進む会話にどのように入っていくかを調べたかったためである。その結果、以下のようなことがわかった。

雑談と比較し、議論では話者交替が多く見られ、年下話者の文単位での発話が上昇し話者3人のターン保有率が等しくなる傾向にある。また、雑談と議論共に話者のターン保有率と話題提供率の相関性があることが分かった。

文末については、親しさや上下関係の有無で敬体での発話に変化が見られた。同学年であっても敬体で話すことがある。また、年下である話者は親しいほど敬体での発話は少なくなった。

また、上下関係のあるグループでは、年下話者の発話傾向が顕著であった。年下話者の発話は発話数が少なく、基本的にあいづちや笑いなど、年上話者の話すことを承認する姿勢を見せている。その中で自分の意見を発する時は、年上話者の発話にあいづちや笑いによって同意し、その後自分の意見を述べている傾向が高いことが分かった。

本研究で扱うことの出来なかった問題として、以下の点が挙げられる。

まず、話題の内容に関する分析を行っていないことである。話題は自分に関するものであるか、他の話者に関するものであるか、あるいはグループの話者には関係のない一般的な話題であるかによって、誰がどのような時にターンを取っているかを分析しなければならなかったが、この課題に着手するには至らなかった。

2点目として、データの一般化である。今回、会話分析をするにあたり、大学生であることのみを条件とし、男女差は考慮に入れなかった。また、本研究の分析でデータが限られていることもあり、話者の個性をぬぐいきれなかったことも危惧される。今後、多様な話者の会話を採取しデータをより一般化し、検証を重ねていきたい。

参考文献

- ・小林郁子 (1984) 「“Discussion” における turn-taking 実態の把握と指導の重要性—」『日本語教育』85号 日本語教育学会
- ・李麗燕 (1995) 「日本語母語話者の雑談における『物語の終了』—物語を終了するために語り手が行う言語行動を中心に—」『日本語教育』96号 日本語教育学会
- ・崔ハナ (2010) 「コミュニケーションにおけるあいづちの機能—あいづちによる turn の獲得：日本人と韓国人の比較から—」『日本女子大学大学院文学研究科紀要』日本女子大学
- ・水谷信子 (1993) 「『共和』から『対話』へ」『日本語学』
- ・中山晶子 (2003) 『親しさのコミュニケーション』くろしお出版
- ・ポリー・ザトラウスキー (1993) 『日本語の談話の構造分析 勧誘のストラテジーの考察』くろしお出版
- ・林卓男 (2008) 『談話分析のアプローチ—理論と実践—』研究社
- ・筒井佐代 (2012) 『雑談の構造分析』くろしお出版
- ・砂川有里子 (2005) 『文法と談話の接点—日本語の談話における主題展開機能の研究—』くろしお出版
- ・李麗燕 (1997) 『日本語母語話者の日常会話における『物語の自主的な開始』』『1997年度日本語教育学会春季大会予稿集』日本語教育学会